

創世ホール通信 No. 296

催し案内 + 文化ジャーナル
 2019年9月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
 電話：088-698-1100 ファクシミリ：088-698-1180
 〒771-0207 徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91



♪ シンフォニア徳島 ♪ そよかぜコンサート

9月15日(日)

午後2時30分～(開場：午後2時)

会場：3階 多目的ホール 入場無料

演奏曲：「となりのトトロ」(『となりのトトロ』より)、
 「君をのせて」(『天空の城ラピュタ』より)
 歌劇「ペールギュント」第一組曲より「朝」
 (グリーグ)、ほか
 演奏時間約80分

主催：シンフォニア徳島(☎050-5438-5118)

後援：北島町教育委員会

徳島県内の音楽家で結成されたアマチュアオーケストラ
 による演奏会です。指揮を体験できるコーナーなど、子
 どもから大人まで楽しめるプログラムになっています。

東京音楽大学校友会 徳島県支部コンサート

10月13日(日)

午後1時30分～(開場：午後1時)

会場：3階 多目的ホール

入場料：1,000円

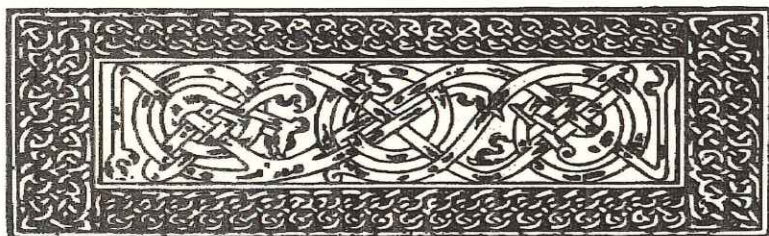
チケット取扱：黒崎楽器・音楽喫茶みき

※図書館・創世ホールでの取扱はありません。

主催▼東京音楽大学校友会徳島県支部

(問合せ先・吉永 090-4972-0554)

後援▼北島町教育委員会



北島トラディショナル・ナイト 23 アイリッシュ・音楽の森 ～アイリッシュ・音楽ユニット きゃめるるコンサート～

10月31日(木)

午後7時～午後9時

会場：3階 多目的ホール

出演：きゃめるる

高梨 菖子 ホイッスル

酒井 絵美 フィドル

岡 皆実 ブズーキ

成田有佳里 バウロン

コンサーターナ

入場料：一般 前売 2,000円

当日 2,500円

小中高生 前売 1,500円

当日 2,000円

(※未就学児童入場不可)

チケット取扱：小山助学館本店、フクタレコード

音楽喫茶みき、喫茶・アーロンズ

ジャクソンズ、エミール音楽院

北島町立図書館

(※図書館では電話予約も受け付けています。)

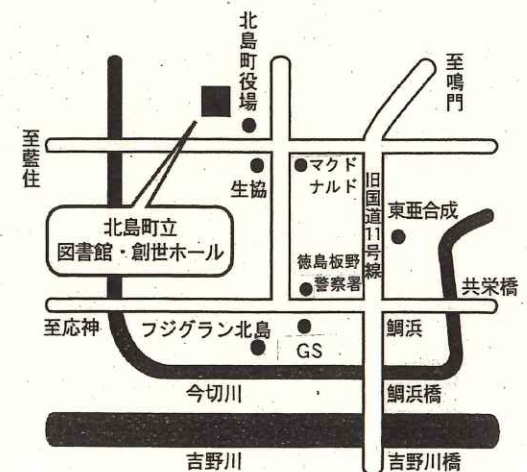
主催：北島トラディショナル・ナイト実行委員会

■毎年ご好評いただいております北島トラディショナル・ナイト、
 今年は古代アイルランドの祝祭の日であるハロウィンに開催します。

■今回は国内女性アイリッシュバンドの先駆者であり、結成10周年
 を迎えた《きゃめるる》の演奏会を行います！陽気で楽しい凄腕音楽
 隊による、華やかなステージをお楽しみください！■演奏曲などの
 詳細は次号以降にお伝えします。ご期待ください。



《きゃめるる》：左から 酒井絵美(フィドル)・成田有佳里(バウロン)・
 高梨菖子(ホイッスル)・岡皆実(ブズーキ) (敬称略)



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

追悼★野坂恵子（操壽）先生

北島町立図書館協議会委員長、創世ホール・サポーター★小西昌幸

■2019年8月27日に箏曲演奏家の野坂恵子（二代目野坂操壽）さんがお亡くなりになった。急性骨髄性白血病という。北島町立図書館・創世ホールは2004年2月29日に野坂さんの演奏会「伊福部昭の箏曲宇宙」を開催している。同公演は、著名な音楽家・伊福部昭先生の卒寿（90歳）を祝う記念祭の一環で行なった思い出深い事業である。その時のことを中心に綴り、野坂さんの思い出を忍びたい。

■私は、伊福部昭さんに関する著作のある木部与巴仁氏（きべ・よはに 愛媛出身、著述業）と20代初め頃から面識があった。彼も私も手書きミニコミをやっていた人間で、そこからの交流である（木部氏は『イレギュラー』というガリ版ミニコミ、私は『ハードスタッフ』という手書きオフセットのミニコミ。木部氏のミニコミに小西インタビューが掲載されている）。木部氏の著作を通じて、伊福部昭という人の偉大さを改めて知った。いつか伊福部さんに関する催しをやりたいとひそかに考えてきたが、音楽家の足跡に正面から向き合うことになるので、施設の規模や予算の制約がある中で舞台の構成、音楽演奏をどう扱うかということについて、何年も悩むことになった。■2002年8月に北海道に出かけたとき、創世ホールでの催しの方向性が定まった。長年熟成させた構想の輪郭が明確になったとでもいおうか。2日間の催しにすること、初日は講演会を木部さんで行なうこと。2日目は演奏会で野坂さんによる伊福部楽曲演奏で行なう。そうすれば予算と舞台面積に制約のある小規模館でも伊福部先生へのオマージュは捧げられるのではないか。見通しが開けた。

■北海道では、勇崎哲史さん（写真家、伊福部昭さんの甥）、南出匠さん（当時音更町教育委員、印刷所経営）、山田雄司さん（伊福部昭と木部与巴仁の熱心なファン、自営業）たちの歓待を受け、それらが刺激となり、かけがえのないエネルギー源になった。

■このときの北海道探訪は格別濃厚なものだったので（ここには記さないがアイリッシュ人脈や、古書人脈なども登場する）、のちに克明な紀行文にまとめてみようとは何度も試みたが、思いがあふれ、うまくまとめられなかった。初日に勇崎さんに連れられて当時札幌大学学長をされていた文化人類学者の山口昌男先生に会い、翌日は山田さんの運転で、札幌から片道5時間かけて伊福部先生ゆかりの音更（おとふけ）町に行った。伊福部先生の父上は音更村の村長を務め、のちに伊福部先生は、荘厳・雄大な「音更町歌」を作曲されている。この日は、途中で山田氏が彼の関与する催しの打ち合わせのために安東ウメ子さん（著名なアイヌの歌手）のご自宅に立ち寄った。私たちが、音更町に完成した伊福部先生の音楽碑探訪に行くことを知った安東さんも同行することになった（安東さんのおうちの居間と台所の間にかかっていた暖簾は鳴門海峡の絵柄だった。安東さんは徳島にもおこしになっていたのだ）。

■音更町では南出さんの案内で、豊かな森林の中にある伊福部昭音楽碑を厳粛な気持ちで訪れた。私たちが歩く1メートルほど前を、当たり前のようにリスが横切っていたことを思い出す。また南出さんは大変な英国ロックのコレクターであり、趣味が合った。このことも忘れ難い。翌日は別ルートで、レコード館などに立ち寄った（ここで北海道賛歌のジャケットを撮影）。

■この札幌―音更町への往復の車中の山田さんとの会話の中で、少しずつ野坂先生による演奏会構想が明確になっていったのだった。北海道の人たちの心や同地の大自然が、背中を押してくれたのだと思う。

■野坂さんに演奏会出演の依頼状をお送りしたのは、2003年の夏頃だったろうか。徳島市にお住いの藤本玲さんが野坂先生のお弟子さんなので、貴重な多くの助言をいただきながら構想を練り、書簡をしたためた。伊福部昭先生にも企画概要を書いた書簡をお送りした。

■初めて、東京の代官山にある野坂先生のご自宅を訪れたのは、2003年10月27日（月）だった。新宿駅で木部さんと待ち合わせ、ご先導いただいて午前10時にお邪魔したのだった。おうちは静かな住宅街にあった。野坂さんは、陽気で上品で朗らかな美しい方だった。私より20歳ぐらい年上のはずだが、10歳は若く見えた。どうにかすると同年代かと錯覚するようなオーラが漂う人だった。

■打ち合わせで、演奏会は伊福部先生の記念の催しなので和服で行なうこと、館側は20センチの平台を用意すること、音響反射板を設置し生音（なまおと）で行なうこと、音響のことを考慮し座布団も緋毛氈（ひもうせん）も使用しないこと、演奏会前日までに3面の箏と着物を入れたトランクをお送りいただくことなどを確認した。座布団か敷物がないと膝が痛いのでは、というと膝にパットを当てているので大丈夫とのことだった。約1時間10分ほどの滞在だった。おりしもこの時期（2003年秋）に伊福部先生が文化功労者、野坂さんが紫綬褒章を受賞して、数日以内に新聞発表というタイミングだった。ギフトカタログが、毎日山のように届いて困っていると言っている野坂さんは笑っていた。何枚か写真も撮らせていただいた。そのほかに何を話しただろう。沢井一恵さんが北島町で演奏をされたことがあり（石井町の遠藤綾子先生の主催）、そのとき沢井さんのアルバム（ピーター・ハミルがヴォーカルで参加）にサインをいただいた話をしたら、沢井さんとは仲良しなんですよとおっしゃっていた。この日は午後、竹内博さんのお導きで四至本アイさん（大伴昌司ご母堂）のご自宅訪問をしたのだった。主題からそれるのもう触れないが、この東京訪問のことは「文化ジャーナル」2003年11月号に詳しく掲載しているので、関心ある人はご覧いただきたい（北島町のホームページで読むことができる）。

■北島町立図書館・創世ホールは、2004年2月28日と29日に「伊福部昭先生卒寿記念祭」を開いた。28日に木部与巴仁講演会「伊福部昭・時代を超えた音楽」、29日に野坂恵子演奏会「伊福部昭の箏曲宇宙」という布陣である。北海道早来町から来た山田雄司氏は徳島で3泊された（小西宅で3泊）。山田氏には駐車場整理やら、当日配布資料の挟み込み作業、販売物への値段シール貼り付けなどでお手伝いいただいた。藤本玲先生からは50枚、遠藤綾子先生からは30枚演奏会の前売り券をご購入いただくなど、涙が出るような応援をいただいたのだった。

■伊福部昭先生卒寿記念祭にまつわるエピソードや演奏会で披露された楽曲についての解説などは「文化ジャーナル」でたくさん記録した（2004年1月号～5月号。木部さんへの電子書簡インタビュー含む）。400字詰め原稿用紙換算で軽く40枚以上の分量があると思う。これらは北島町のHPのほか、『ハードスタッフ』12号（先鋭疾風社、2008年10月刊）で読むことができる。

■野坂先生とお嬢さんの小宮瑞代さんは28日の11時45分に到着する飛行機で来られた。私は催しで身動きが取れないので、空港への出迎えは藤本先生にお願いした。同じ便の飛行機には、勇崎哲史さん、伊福部達ご夫妻（達氏は伊福部昭先生の兄上の息子で東大教授）、八尋健生氏（不気味社、男声アカペラ・コーラスで伊福部特撮音楽などを多数CD化）も乗っていた。私は、勇崎さんと伊福部達ご夫妻と八尋さんの出迎えを徳島ギター協会の川竹道夫さんに依頼した。

■事務室で八尋さんと名刺交換して雑談していると野坂先生ご一行が到着

した。野坂先生に八尋さんを紹介した。「こちらが不気味社の八尋さんです」というと先生は大喜びされた。3階控室で本番を控えている木部さんに、野坂先生が到着したことを報告に行っていると、事務室から「小西さんに来客です」という。慌てて降りると、香川のMさんだった。彼ははれつきとした国立大学の医者で、特撮サークル・四国ゴジラ組合を運営している。昨年の竹内博さん講演会も、今回の伊福部先生の催しも力強く応援してくださっている。野坂さんにMさんを紹介すると、「まー、不気味社の次は四国ゴジラ組合ですか」と、とても楽しそうにおっしゃって笑った。

■28日14時から木部与巴仁氏講演会「伊福部昭・時代を超えた音楽」開演。客席には野坂先生の姿があった。講演終了後、野坂先生は木部さんの著作を複数買って、サインの列にも並ばれたのだった。木部さんはその日の夕方飛行機で東京に帰還した。同日の夜、徳島市八万町大坪のレストラン《シェ・熊谷》で《野坂・小宮両先生を囲む会》を開いた。約20名の参加者の中には、藤本玲先生のお弟子さんたちが多数いて、野坂先生の姿を見てぼろぼろと涙を流す人もいた。全員で1分間ずつ話すコーナーを設けた。伊福部達さんは伊福部家のルーツが大国主命にさかのぼる系図があるという話をされた。野坂さんは伊福部先生の奥様のことを話された。伊福部先生のお召し物はすべて奥様がおつくりになったのですという趣旨のことを話された。山田氏はアイヌの歌を、川竹さんはマジックをそれぞれ披露して野坂さんは喜ばれた。不気味社の八尋さんの番になったとき、「何か歌ってくださいよ」と野坂さんはリクエストした。八尋氏は「モスラ対ゴジラ」の中の「聖なる泉」（伊福部昭作曲）を独唱した。同曲は、翌日野坂先生が演奏される「胡哦（こが）」の主題部分に同じメロディが登場する名曲なのである。本当に楽しい夕べだった。

■2月29日11時45分、飛行機で伊福部玲さん（伊福部昭先生ご長女。陶芸家）が徳島入りされた。山田さんと一緒に出迎えた。同日18時30分、野坂恵子さん演奏会「伊福部昭の箏曲宇宙」開演。客席には230名の熱心な聴衆が集まっていた。中にはずっと顔を覆っている男性がいた。彼は泣いていたのではないか。休憩時間に川竹さんから話しかけられた。野坂先生は5曲に全力を出し尽くされるので、アンコールは無理だと思ふ。だから、小西館長がインタビューをしてください。いいですね。これは命令であった。私は、第二部の演奏の間、頭を掻きむしりながら質問事項を考えメモしていたのだ。幸い終演後のインタビューは滞りなく終えることができた。何人かの人から良かったよ、とお褒めの言葉をいただき、ちょっと嬉しかった。

■その日の打ち上げ会場は、フジグラン北島のパーミヤンだった。この席で、私は野坂先生から「小西さん、来年の講演会の講師は誰なのですか。もうお考えになっているのでしょうか」と鋭く問い詰められた。驚いた。この人は並みの人ではないと思った。私は常に講師候補を考えているので、「実は寺山修司さんの奥様を考えています」と述べた。野坂先生は「まー、九條今日子さん」と即座に返したのだった。野坂先生は、ある時期渋谷のジャンジャンなどに出演し、ポピュラー系人脈と接していたと聞いている。だから前衛演劇関係にもお詳しくあったのだ。おそらく、順調に邦楽の古典芸能の道を歩むことにある種の葛藤があり、悩まれた時期があったのだと思う。だが、それは芸域を広げ、深い表現の獲得にもつながったのだ。だからそれら乗り越えた時、第2代野坂操壽をためらうことなく名乗ることができたのではないか。野坂先生からは、その後東京での津田ホールのリサイタルの招待状が毎年届き、可能な限り参加した。また年賀状のやり取りも続けた。あの優しい笑顔にもう会えないのかと思うと、やはりとても寂しい。野坂恵子先生のご冥福を心からお祈りします。（20190910脱稿）